●徒然草の再発見

恋する兼好

川平　敏文（日本近世文学）

全国の中・高等学校の国語の時間に、徒然草を教えない学校は恐らくない。本書は格好の古文入門書としての地位を確立している。しかしどうも――中・高生向けだから致し方ないことではあるが――例えば「高名の木登り」「弓の上手」などの教訓的章段や、「ねこまた」「仁和寺の法師」などの滑稽的章段ばかりが選ばれていて、ために徒然草は、ごく真面目な教訓随筆で、たまに滑稽な説話も混じっている本、くらいに思い込んでいる人も少なくないようだ。それは決して間違いではないが、しかし徒然草には、今日ほとんど一般には知られることのない別の一面もある。今回はそこのところを述べてみたい。

1　徒然草の恋

教科書が採らない、徒然草のウラの定番といえば第三段である。本段は後述のように、江戸時代には最も著名な章段の一つであった。全文を引用し、筆者流の「超訳」を試みよう。

万にいみじくとも、色好まざらん男は、いとさうぐしく、玉の巵の当なき心地ぞすべき。

露霜にしほたれて、所定めずまどひ歩き、親の諌め、世の謗りをつゝむに心の暇なく、あふさきるさに思ひ乱れ、さるは、独り寝がちに、まどろむ夜無きこそをかしけれ。

さりとて、ひたすらたはれたる方にはあらで、女にたやすからず思はれんこそ、あらまほしかるべきわざなれ。

諸芸万般に堪能であったとしても、恋愛の情を解さない男は本当につまらない。他人から見れば馬鹿げているくらいに、情熱的な恋をすることの素晴らしさ！　とは言え、女性から本当に馬鹿だと思われたら仕方がない。一目置かれるようなやり方が理想的なのだ、と。

同じような内容は、「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは」という、これまた著名な第一三七段の中にも見える。

万の事も、始め、終りこそをかしけれ。男女の情も、ひとへに逢ひ見るをば言ふものかは。逢はで止みにし憂さを思ひ、あだなる契りをかこち、長き夜を独り明し、遠き雲井を思ひやり、浅茅が宿に昔を偲ぶこそ、色好むとは言はめ。

これも「超訳」する。――何事も始めと終わりが面白い。男女の関係も、いつも会える状態ならば面白くない。会えないつらさ、独り身の寂しさ、昔の恋人の懐かしさ、そのような気持ちを尊ぶ人をこそ、本当の色好みというのだ、と。

他にも、久米仙人が物洗う女性の脛（はぎ）を見て、空中飛行の通力を失ったのを尤もだとした第八段（本稿末挿画参照）、妻は定めては持たずして、時々通うくらいの方が愛情が長続きする、と述べる第一九〇段。これらはどう見ても恋愛論である。前者ではよい男の条件を述べ、後者では恋愛の面白さを語っている。兼好が「世捨て人」であり、徒然草が「無常の文学」であると学校で習ってきた我々は、このような発言に出くわすと、少し戸惑ってしまう。

兼好と恋――。しかしこの組み合わせは、徒然草以外に、それとほぼ同時代の軍記物、『太平記』の中からも抽出される。すなわちその巻二一には、足利尊氏の執権で当時権力を欲しいままにしていた高師直（こうのもろなお）が、とある婦人に恋をし、そのために兼好が艶書（ラブレター）を代筆してあげたという仰天の逸話が残っているのだ。要約して示そう。

師直は顔世にまったく心を奪われ、「何度も言い寄っていれば、情けにほだされるかもしれない。手紙を送ってみよう」といって、兼好という、書に堪能な遁世者を呼び寄せ、豪華な料紙に香をたっぷりと薫らせて、言葉を尽くして書き送らせた。

しかしながらその艶書は、結局中身を読まれることもなく、庭にうち捨てられる。短気な師直は激怒して、「いやいや、物の用に立たぬ物は手書（てかき）（＝書の上手な人）なりけり。今日よりその兼好法師、是（これ）へよすべからず」と、兼好を自邸に出入禁止とする。この話はもともと師直の横暴ぶりを表す一話として描かれたものであるから、出入禁止になったとしても、兼好にとってはさほど恥ずかしいことではなかったであろうが、ともあれ、ここにはそういう話が書かれてある。

この話が事実に基づくものなのか、それとも全くの出鱈目であったのかを、現存する史料から判断するのは難しい。兼好という人物が、普段どのような発言や行動をしていたのか、これもよく分からないが、生（なま）の兼好を知る世代にとっては、上のような徒然草の恋愛論は、さほど違和感のあるものではなかったかもしれない。

そして、そのようなイメージが母体となって生み出された思われるものに、江戸時代に流布した兼好の偽伝、『園太暦（えんたいりゃく）』偽文がある。この偽文は、時の経過にしたがって様々なエピソードが付加されていったのであるが、その原型とも言える話の大筋はこうだ。

兼好は伊賀の領主であった橘成忠（たちばなのなりただ）のもとに身を寄せ、当時十七、八であったその娘と密通、そして某年某月某日、かの地で終焉を迎えた。その密通の時に詠んだ兼好の歌が、

忍山（しのぶやま）またことかたに道もがなふりにし跡は人もこそしれ

という、『新拾遺和歌集』恋の部に入集する和歌だったというのだ。「あなたに忍んで通うこの道。他に道はないものでしょうか。私の通いつめたその跡を、人が見つけてしまいそうで」（詳しいことは拙著『兼好法師の虚像―偽伝の近世史―』〈二〇〇六年、平凡社〉に就かれたい）。

これはむろん作り話であるのだが、「兼好と同時代に生きた、ある貴人の日記（『園太暦』）から抜粋された記事」という触れ込みで流布したものだから、江戸時代の人々は、基本的にはこれを真実として迎え入れた。全く罪な話である。

ところで、この偽文の中の密通事件が、兼好の若き日の恋愛譚であったのならば、それはまあそれでよい。しかし問題なのは、この偽文の作者が兼好を評して、「好色法師也」と言っていることだ。つまり彼はこの伊賀での密通事件を、明らかに兼好出家後の話として設定しているのである。そういえば『太平記』の逸話の中でも、兼好は「兼好法師」と書かれてあった。出家後も徒然草・第三段のような恋愛論を展開し、時には人妻への艶書の代筆まで引き受ける――そういう型破りで、やや無節操な隠者像が、これらには投影されているのである。

2　通俗文芸の中の兼好

上のようにあらぬ「実話」まで捏造されるほどであるから、「兼好」と「恋」という、一見アンバランスな取り合わせは、江戸の市井人をよほど面白がらせたと見える。例えば江戸前期の流行歌の歌詞を集めた『松の葉』には、次のようなものがある。

…すねて茂りし松山の、かのわけ法師がそこはかと、かき集めにし徒然（つれづれ）に、綸子鼻緒（りんずはなお）の足駄（あしだ）にて、作りし笛には鹿も寄る、肩なん過ぎにし黒髪の、綯（よ）れる綱には大象（ぞう）も、繋がるゝ習ひかや、…（巻四、浅黄帷子（あさぎかたびら））

「わけ法師」の「わけ」とは、例えば『好色一代男』巻五に「わけ知りの世之介様」などと見える「わけ」、すなわち恋愛の情に通じた、という意味。この「わけ法師」が兼好を指すことは、その後の文章が徒然草を典拠とした文章であることからも明らかである。また同じ『松の葉』には、

…幾（いく）たび思ふ宿の首尾（しゅび）、とは思へども只（ただ）ひと筋に、此（この）盃手に触れよ、…（巻二、春日野）

訳（わけ）知らぬ人ならば、たとひ万にいみじきとても、玉の

などという歌詞もある。ここでいう「訳（わけ）」も先ほどの「わけ」と同じ恋愛の情の意で、例の「万にいみじくとも」の文脈を踏まえつつ、それを解さないのは無粋だ、野暮だと言っている。当時の流行歌の中で、兼好の言葉はあたかも

色道の格言のように扱われている。

また、当時の俳諧における付合語辞典（連想語辞典のようなもの）である『類船集』には、「色好」という項目があって、「袖の香」「こすの内」「業平」などといった「色好」の連想語が並んでいるが、その後の説明文の中に、「世の人の心まどはす事、色欲にしかずとは、兼好が筆也」とある。徒然草・第八段を踏まえて、兼好もこう言っていると付け加えているのである。これも一種の格言化の例であろう。

兼好とはいったいどのような人物だったのか。出家してからもこのような発言をするくらいであるから、さぞかし若い頃は恋多き人だったのであろう。そのような想像のもとで創作された浄瑠璃の一つが、近松門左衛門の浄瑠璃『兼好法師物見車』（宝永七年以前上演）である。この話は、先に見た『太平記』の艶書代筆事件を種として描かれている。

後宇多院の第八姫・卿の宮は、高師直が言い寄るのに困じ果て、かねてからお気に入りだった北面の侍・卜部兼好に身の処し方を相談する。そこで兼好は侍従という女房を頼んで、塩冶判官高貞の妻・顔世の美貌を師直に吹聴し、師直の気持ちを卿の宮から逸らすことに成功する。

さて師直から艶書の代筆を頼まれた兼好は、かえって貞節の道とは何かを書き述べて顔世に送ったので、当然ながら師直の思いは成就することなく、怒った師直は兼好を自邸に出入禁止にする。しかしそれはもともと兼好の思惑どおりで、自らの悪縁を絶ち切ることができた兼好は、卿の宮に「もう御安心を」と言上する。それを聞いた宮の言葉は次のようなものだ。

（宮は）殊なる御機嫌にて、「嬉しい事を聞きしよな。恋に機転な兼好や、そなたの様な恋知りに、惚れ損なふて口惜しい、平人の娘と生まれたら、人手にかける男でない」。

さらに宮が腰元たちに、自分は身分が違うからどうにもならぬが、そなたたち、あのような「恋知り」の男を放っておく手があるものか、とけしかけると、腰元たちは我先にと兼好にすがりつき、袖を引くやら裾を引くやらの大騒ぎ。兼好は逃げまどいながら、「ああかしましい、やかましい。これは恋の大晦か」。かく言いながら自ら烏帽子を取ると、実は髪は飾り髪であって、すでに頭を丸めていた。あまりにモテすぎて、俗人でいることに嫌気がさしていたのである。

それでも性懲りのない宮は、後に兼好の庵室を訪れた時に、彼に色めき戯れかかろうとするが、道心堅固の兼好はもとよりそれを受け入れようはずもない。再びドタバタと逃げ回るはめになるのであったが、そこで宮は、次のように兼好の言行不一致を指摘する。

此の書きかけし草紙（＝徒然草）を見れば、心深き文章の中にも、「よろづにいみじくとも、色このまぬものは、玉の巵のそこなき心地」と書きながら、このはしたなき振る舞いは。筆に書くは偽りごと。徳を飾りて名を求め、名聞売僧の嘘つき。玉の巵の底抜け。

またもや「玉の巵」の一段である。このフレーズがいかに兼好のイメージを規定し得るほどの大きなインパクトを持っていたかが知られる。

もう一つ俗流の兼好像を。江戸中期、歌舞伎の市川海老蔵と同じくらいの人気があったというのはホントかウソが知らないが、ともかく浅草の名物として知らぬ者はなかったと言われるのが、講釈師・深井志道軒である。その講釈は陰茎の形をした木を手に持って、見台（机）を叩きながらの風流講釈、男女の話にからめて人の興味を惹き、最後は教訓に落とすという体のものであったらしい。

その志道軒の狂講になぞらえた戯作に、『兼好今法師志道軒徒然夢物語夜講釈』なる奇書がある。半紙本二冊、宝暦頃の刊行でもあろうかと、本書の複製本（昭和四十九年、有光書房）を出された岡田甫氏が解説で述べておられる。本書の口絵部分には、志道軒が例の棒きれを持って、燭台と見台の前にやや斜めに座り、次のような言葉を語っている様子が書かれている。

徒然なるままに日暮らし、硯にむかいて、そこはかとなき嘘を絵に写せば、をかしうこそ物ぐるほしけれ。色好まざらん男はいとさうぐしく、玉の巵の底なき心地こそすべき。

書名の角書に「兼好今法師」とあるように、この口絵はまさしく兼好図の、そして徒然草のパロディである。徒然草を色道の方面から語った先蹤としては、神道講釈師・増穂残口の『徒然東雲』があるが、その残口の講釈に影響を受けたと言われる志道軒であってみれば、彼が当代版・兼好を演じたというのは全くの虚構ではない。恐らく実際に、彼はこの「玉の巵」のフレーズを幾百回となく唱えていたはずだ。

通俗文芸の世界では、「兼好」と「恋」の結びつきは、ほとんど当たり前のように出てくる。現代からすればあまりピンと来ない兼好像が、江戸時代の文芸界では躍動していたのである。

3　学者たちの議論

通俗文芸の世界における兼好像が「恋」と深く結びついていること、上に述べた通りであるが、徒然草を学術的に位置づけようとした人々の間では、この問題はどう取り扱われたであろうか。

この問題についての最も早い反応は、江戸初期の儒学

者・林羅山の徒然草注釈書に見られる。羅山は徒然草・第三段の恋愛論について、次のような反駁を加えている。以下、適当に要約して引用する。

兼好の、「色を好まないのは人間の自然なあり方ではない」とする考えは、仏教者にしては殊勝な考えである。なぜなら男女の道は、飲食にもまして捨てがたいものだからだ。けれども同じ兼好が、恋に迷って親の諫めや世の譏りをも顧みないのを良しとするのはいかがなものか。恋愛は大事なものであるが、度が過ぎてはいけないのである。（『野槌』）

仏教は基本的には色欲を認めない。欲望を捨て去ることで悟りに近づくからである。しかし儒教は逆に、それを人間の基本的な欲望として肯定する。子供が生まれなければ、社会が成り立たないからである。羅山はそういう意味では、兼好のこの刺激的な恋愛論を「なかなかよく分かっているではないか」と評価している。しかし恋も度が過ぎれば、儒教の大事な徳目としての「孝」に支障が出てくる。親の言うことを素直に聞き入れるのが、子としての務めだからだ。そういう意味では、兼好の論は行き過ぎだと羅山は批判するのである。

徒然草が全篇マジメなものであると考え、兼好の節操を弁護しようする側の人々は、このような批判に対してどういった反論をしたか。例えば羅山とも親交が深かった歌学者・松永貞徳は、次のようにこの段を読む。

若い時に女色にふけるのは、中国でも日本でも嫌うことなのに、徒然草でそれを奨励するように書いているのを、人は不審に思うかもしれない。しかしここが兼好の新しい筆法で、まずこのように恋の道を褒めるのは、後にビシッと戒めるためである。例えば虫薬（子どもの腹痛を治す薬）を飲ませようとする時には、砂糖を先に含ませるのと似ている。源氏物語の方法がこれである。（『慰草』）

恋愛の奨励のように見えるのは、謂わば釣り餌であって、実は後に教訓を垂れることが主たる目的という。言い換えれば、「万にいみじくとも」云々の言葉は、兼好の本心でないということである。

また、彼らより一世代ほど後の歌学者・高田宗賢は、この段を、例えば歌人が恋の題を前にして歌を作る場合のように、歌人としての兼好が、業平や光源氏といった色好みになったつもりで、その気持ちを書いただけなのだと説明している。つまりこれはあくまでも「虚構」であって、やはり兼好の本心というわけではないというのである。「好色法師」というイメージに堕ちぬよう、どうにかして兼好の節操の正しさを保持しようと、兼好擁護派の学者たちはいろいろと腐心したようだ。

しかしこれらの弁護を得てもなお、兼好の節操を疑う者

は跡を絶たなかった。元禄頃の儒学者・藤井懶斎（らんさい）がその一人である。彼は先に見たような貞徳や宗賢の説に対して、次のように反駁している。まず貞徳の説に対して。

後に戒めるために、先に恋の道を褒めたのだという解釈は、まず刀で人を傷つけておいて、「これは後に治療するためだ」と説くようなもので、どんなに素晴らしい治療の技術があったとしても、最初から傷を負わせないのに越したことはない。（中略）また、砂糖を少し与えて虫を引き動かし、虫薬を何度も飲ませれば、確かに虫は退くであろう。しかし薬が少しで砂糖が多ければどうなるか。そもそもこの徒然草は、好色（砂糖）を語ることはしばしばであるが、それを戒める言葉（虫薬）は少ないのである。

懶斎先生、なかなか鋭いツッコミである。また宗賢の説についてはこう言う。

もし和歌の撰集ならば、確かに「恋」の部が必要かもしれない。しかし徒然草の中に、「恋」が必要である理由は何一つない。兼好はこの書物において、時に釈迦に代わって無常を説き、老荘に代わって玄虚を説いている。そして彼は自ら言う、「狂人のまねとて大路を走らば、すなはち狂人なり。…偽りても賢を学ぶを賢といふべし」と。ならば兼好は釈迦や孔子、老子の真似をこそすべきであって、「何ぞ恋する戯れ男の真似をばせんや」。（『徒然草摘議』）

懶斎の頭の中には、文章というものは「道」を載せる器であり、すべからく世の役にたたねばならないという、いわゆる文学載道論がある。したがって、そこから逸脱するような発言は受け入れられなかったのである。我が国の古典として名高い伊勢物語や源氏物語でさえ、彼ら儒学者は基本的に、これを邪淫の書として敬遠する。純粋と言えば純粋であるが、偏狭と言えばいかにも偏狭な考え方である。そしてこの江戸前期までは、そういうアツい儒学者が特に多かった。

もっとも、懶斎はこれを「我が子のために」する論だと言っており、本心ではこのような兼好のあり方を許容するだけの心の余裕はあったのかもしれない。しかし儒学という新しいものの考え方が十分に咀嚼されるには、時代はまだまだ蒼く、彼らは努力してこの思想を市民に浸透させる必要を感じていた。その際の格好の素材として――どちらと言えば反面教師的な素材として、徒然草が取り上げられたのである。

兼好擁護派は再びこれに反論するのであったが、今それらは省略に従い、批判派の意見の一端のみいくつか紹介しよう。「釈門（＝仏道）に入りにし甲斐さへなくて、女色に溺れ一生を誤り、今に至つて汚名を残しつるこそ、なげきても余（あまり）ある事なれ」（室鳩巣（むろきゅうそう）『駿台雑話』巻四「つれ〴〵

草」)、「色におぼれたる法師なりな」(田安宗武『徒然草評論』第七段)、「この法師、さとった貌でも実はいかう(=とても)女好きで有たことは、この段の次で直に知れる。夫は…」(平田篤胤『悟道弁』巻上)等々。「兼好」と「恋」という命題は、通俗文芸界のみならず、学芸界においても等閑視できない問題なのだった。

4 むすび

恋する兼好。あまりイメージが湧かないかもしれないが、少なくとも江戸から明治頃までは、そのような兼好像が息づいていたということが知られるであろう。それにしても、そのような兼好像が陰に追いやられ、兼好はきわめて真面目な人で、徒然草は何やら説教くさい本、というようなイメージが定着するのはいつごろなのだろう。

それはやはり、本格的な国民教育が始まろうとする明治十年代後半からで、徒然草からためになる章段ばかりを書き抜いた、副読本や教科書が現れ始めてからではないのだろうか。それらの先駆け的なものである高津柏樹の『徒然草読本』(明治十七年刊)の凡例には、

又、男女の交情をいふに至りては、大体、妻をば持つまじき者とし、密婦を愛する件を所々に載せ、彼好色まざらん男子は玉の巵の底なき心地すといひ、又は久米の仙人が通を失へるを説き、女の髪には大象も繋がるといひ、其余(=その他)、雪月花につきて、色情の談話所々に散見せり。何れも文を舞し意を巧にして、限りなき風韻ありて面白けれど、道徳上より看る時は、此亦疵なき物ともいふべからず。

とある。要は最後の一文に明らかで、ゆえに「此等の件々を削除し、文章の優美にして、意味の精妙なる者のみを採らば」、徒然草はもっと輝きを増すであろうというのである。同じように、大和田建樹『徒然草類選』(明治十八年刊)の巻頭言には、「文章はよしといへども、事猥褻にわたりて教科書に不適当のものはこれを撰ばず」と断られている。

もちろん明治に入って、徒然草の注釈書がこれら抜粋本ばかりになったというわけではない。きちんと全章段を注釈したものがいくつも現れているのであるが、それにしても「教科書」の威力は絶大であるには違いない。さらには特に戦後、我が国の文学史の中に「中世」という時代区分を設けることが一般化し、その時期の文学が「無常観の文学」として総称されるようになったとき、「恋する兼好」像はほとんど陰に追いやられてしまった。無常観論者によれば、兼好の恋愛発言もまた、結局は「はかなさ」を根底に持っているのだという。しかし、私にはそこが、何か分かったようで分からない部分なのである。兼好は本当に、

それを「はかない」ものと観じていたのだろうか。

近代における徒然草解釈の変遷については、私自身まだまだ勉強中の身であるので、これ以上のことは言えないが、取りあえず江戸時代における兼好像の一端を紹介することで、徒然草に別の一面があり、それが徒然草の評価の上でかなり大きな問題となっていたことは知っていただけたのではないかと思う。兼好という人物の人柄や徒然草の執筆意図を考えるときに、一度「無常観」という近代の呪縛を外して、ゼロの段階まで遡って考えるのもまた有効なのではないかと思うのである。

物洗う女性の脛を見て神通力を失う久米仙人＝『徒然草絵抄』より（部分）